

## 「天に宝を」

詩篇 第24篇 1節～6節  
マタイによる福音書 第6章 19節～24節

説教 岡村 恒牧師

あなたがたは「天に、宝をたくわえなさい。」(20節)主イエスが大勢の人々にお語りになった言葉です。主イエスは群衆をご覧になって、飼う者のいない羊のようだと言われ、深く憐れんでこの言葉をお語りになりました。

群衆の中には、裕福な生活をしている者、地位のある者もいました。多くの方が、多かれ少なかれ地上に宝を積んで、その宝に心を寄せて生きていました。主イエスは、神に心を向けて祈るようにと主の祈りをお教えになり、続いて宝の話をされました。地上で良い行いをして歩めという話しではなくて、私たちの祈りを聞き、私たちの願いをはるかに越えて応えて下さる神様に祈りながら、神様にだけ心を向けて生きてら良いとお教えになったのです。

私たちにあって、地上に宝を積んで生きることはごく普通の生き方です。しかしそれは、目に見えるものに支配され、奴隷になってしまう生き方です。地上でたくわえる宝は、虫に食われ、さびつき、盗人に奪われてしまいます。目に見えない小さな虫が衣服に穴を開けるように、私たちの人生にも不信仰や疑い、迷いといった虫が食いついて、大きな穴が空くまで気づかずにいるのです。固くて丈夫そうな金属が酸化するとぼろぼろになって朽ち果てていきます。私たちが抱く確信や希望も同じです。生きていくためにどうしても必要な酸素が、固い金属を酸化させます。私たちになくてならないものもいろいろあります。しかし、お金や健康、地位や名誉が、私たちの信仰や希望をさび付かせてぼろぼろにしてしまうのです。私たちは虫に食われ、さびつくような世界で、それでもなお、目に見えるもの、地上のものに心を奪われて生きてしまいます。食べるもの、飲むもの、着るものについて思いわずらい続けるのです。

また、私たちは自分自身の価値を知らずに生きています。自分自身を過小評価して、本当に大事にすることができません。しかし盗人は、宝の価値を知っています。旧約聖書を見ると、サタンが人間を誘惑して、神様から引き離そうとする話が出てきます。(ヨブ記第1章など)神様が私たちがどのようにご覧になっているかを、サタンはよく知っています。

だから、あなた自身を神の手の内に、天と呼ばれるところに置いて、盗人に奪われることのないようにしたら良い、と主イエスは言われる

のです。天とは、神様以外のどんなものも私たちに手を触れることさえできない場所です。どんな虫も、さびも、盗人も手をかけることができないのです。神様だけが力をもって支配して下さるからです。私たちの身も魂も、全てがただ神様の手に握りしめられてしまうのです。

私たちは、自分自身の価値も、神様の深い愛も見失います。罪のために真実が見えないのです。パウロは、復活された主イエスに出会って頂いた後、やがて「目からウロコのようなものが落ちて」真実を見るようになりました。神様に愛され、神様のひとり子、主イエスの命と引き替えに罪を赦された自分を発見しました。私たちも、神様が与えて下さる信仰の目をもって、この世界を見、自分自身を見ることができるようになります。洗礼を受ける時、新しい光を目にし、新しく世界を発見します。

地上で、目に見えるものはやがて虫に食われ、さびつき、盗人に奪い去られます。罪と死の奴隷として生きる私たちを、主イエスは憐れんで下さり、神様のものとして生きるようにして下さいました。主イエスは、私たちが神様の手から奪い取られることをお許しにならないのです。

私たちが良い行いをし、律法の定めを守って天に宝を積むものではありません。信仰者らしく生きて初めて、私たちの全身全霊が神様のものとされるものではありません。まず神様が私たちを愛して、「わたしのものだ」と宣言して下さいました。私たちがただ信仰によって、天の宝とされるようになりました。神様は、私たちを神様のものとし、御元に置くために、ひとり子主イエスを犠牲にしてまで私たちを取り戻して下さいました。どんな虫にも食われず、さびつかず、盗人に奪われることがないように、私たちが天の宝として下さいました。どんな時にも、私たちから奪い取られることのない確かな慰め、変わる事のない希望があります。生きていても死んでいても、私たちの身も魂も主イエス・キリストのものだ。この事実が、私たちの慰めです。

主イエスを救い主として信じ、自分自身が神様のものであることを受け入れ、ただ神様のものとして生き始めたら良いのです。神様は、私たちひとりひとりを天の宝として、固く握り締めて下さるのです。

(記 岡村 恒)